

濃州関ヶ原合戦の展開：竹ヶ鼻城の戦いと福島正則

山田 昭彦

The Expansion of Sekigahara Battle in Mino Province

: A Focus on the Battle of Takegahana Fort and the Trend of Fukushima Masanori

YAMADA Akihiko

関ヶ原合戦の前段階、濃尾平野では激しい攻防が繰り広げられた。本稿では、東軍先遣隊¹の主将福島正則の動静を通じて、竹ヶ鼻城籠城戦の実態について考察をおこなう。

一 濃州関ヶ原合戦

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦直前のおよそ一ヶ月にわたり、美濃の各地では断続的な戦いが繰り広げられた。八月十六日福東城の戦い、二十一日木曾川の渡河戦と米野の戦い、竹ヶ鼻城の戦い、二十三日岐阜城の戦い、河渡川の戦い、九月一日の郡上合戦、九月十四日杭瀬川の戦いと各地で戦いが繰り広げられ、最終的に九月十五日の関ヶ原合戦を迎えることとなったとされる。まさに、濃州関ヶ原合戦が展開したのである。²（別図参照）

同年八月中旬まで、家康を始めとする東軍の諸将にとっては、事態の推移について疑心暗鬼の状態が続いていた。なかでも最大の不安要素として、福島正則の存在があった。福島は豊臣政権を支えた股肱の臣として、豊臣秀次に代わって尾張を任されており、その動静は東西両軍にとって注視される存在であった。

二 清須軍議

八月十九日福島正則の居城清須城に、東軍先遣隊諸将と家康からの使者村越直吉が集まり、軍議が行われた。この軍議の場には、家康の四男松平忠吉を大将とし、井伊直政、本多忠勝が付けられた徳川軍の先遣隊はまだ到着していなかったが、家康本隊の到着を待た

ず、東軍先遣隊のみで岐阜城攻撃をおこなうことが決定する。黒田長政は現地に未着の井伊直政・本多忠勝に宛て、軍議の結果とともに「天下之勝負川越三相究候³」との見立てとともに、両者の着陣を促す文書を送っている。一方、村越からこの報告を受けた家康は即刻伊達政宗に書状を送るなかで「彼表左衛門大夫（注 福島正則）丈夫御座候⁴」と記しており、この軍議の結果からようやく福島の意思が揺らがないという確信を得たことがわかる。

翌二十日松平忠吉らの到着を待つて改めて軍議が開かれた。この場で、木曾川の川上、河田から攻め込む池田照政（輝政）ら約二万一千と、川下の萩原・起から攻める福島正則ら約一万九千の軍勢⁵、また犬山城の押さえとして中村一忠が置かれたと推測される。

川上から渡河する一隊の中心は池田照政であり、以下浅野幸長・山内一豊・池田長吉・有馬豊氏・堀尾忠氏・一柳直盛ら主に東海道筋の諸将が付けられた。池田家は織田・豊臣家と親密な関係であり、照政は家康娘（次女督姫）婿として、徳川家とも近い関係でもあり家康の厚い信頼を得ていた。

川下から渡河する一隊の中心は福島正則で、以下加藤嘉明・細川忠興・黒田長政・藤堂高虎・生駒一正ら主として西国筋の諸将が付けられた。中でも黒田長政・藤堂高虎といった家康に近い武將に加え、軍目付として井伊直政、本多忠勝が付けられており、正則の動静に対する家康の深い配慮をうかがうことができる。

一方、東西両勢力の間で対応に苦慮した岐阜中納言織田秀信は、結局西軍に与したため美濃の諸将の大半は西軍として、大垣城、竹ヶ鼻城、岐阜城、犬山城を結ぶ木曾川での防衛線を引くこととなった。

東軍の軍勢の配置理由については『池田家履歴略記』によれば次のとおりである。

（前略）かゝる処に正則申しけるは、河田の涉に而岐阜に近く、尾越は船渡にて岐阜へ遠し、然は川上河田の涉を他人にゆつりかたしと諍論ある、井伊・本多の答に、御領知敵国とさかひたれば尾越川に舟筏を組んで渡り給はんも安し、三左衛門殿は御領国へたゞり地形をも御覚悟なき事なれば三左衛門殿を川上に差向け玉ひ、其元川下を御

渡りあらは内府祝着たらんと有ければ、正則其議承引あり、然らば此方の諸軍川を渡り敵地にて狼煙をあくへし（後略）

岐阜への攻略経路については、福島・池田とともに最短で徒渉りのできる河田ルート希望し、譲らなかった。そこで、井伊・本多が仲裁をおこない、清須を居城として地の利がある福島に川下の尾越渡への攻略ルートの変更を求めた。福島は条件として自軍の木曾川渡河完了時に狼煙をあげ、それを合図に河田ルートも渡河を始めるよう求め了承された。これによって、いわゆる東軍先遣隊による木曾川渡河戦の計画が決定したのであった。

福島・池田ら東軍先遣隊が清須に到着してからも、家康には西上する様子がなく、四男松平忠吉らの到着も遅れたことから福島正則は不満を募らせていた。すなわち、豊臣政権の内部対立に家康は関与せず、このままでは自分たちは捨て駒にされるのではといった焦燥感であった。そのため家康との関係が深い照政とは高い緊張関係が生じていたのである。以降、美濃での戦いは東軍内部での池田照政・福島正則両者の対立の危険性をほらみながら、推移することとなる。

三 竹ヶ鼻城の戦い

この戦いの全体像については、『慶長軍記』に次のような記述がある。

濃州竹鼻落城事（六一七）

偕又先手衆ハ、八月廿二日卯ノ刻打立テ、萩原エ押し向。人々ハ、羽柴左衛門大夫・羽柴越中守・加藤左馬助・黒田甲斐守・藤堂佐渡守・京極修理大夫・田中兵部大輔・生駒讃岐守・寺沢志摩守・桑山伊賀守・蜂須加長門守・井伊兵部少輔・本多中務大輔也。竹鼻ノ城主杉浦五左衛門加勢ニハ、島津中務物也ハ高橋也是ハ兵庫頭ノ甥也・毛利掃部頭・梶川三十郎・花村半左衛門等ハ、小越ノ川ノ西シニ芝士居ヲ付、柵ヲフリ、大筒マシ小筒ヲ立並ヘ放懸ル故ニ、小越無左渡人ナシ。爰ニ藤堂佐渡守、人数ヲ川下ニ押廻セハ、黒田甲斐守・田中兵部大輔・生駒讃岐守、桑山伊賀守続ヒテ行。加賀野井村ヨリ一文字二川

ヲ越ラ見テ、不叶トヤ思ヒケン、竹鼻城エ引取りケル。島津中務ハ自是大垣エ引退ク。又島津兵庫頭ハ、中務ヲ助ントテ大垣テ押出ス。石田云、「只今中書是エ可被參。今少見合セ給へ」ト云。兵庫云、「イヤトヨ、中務ヲ棄殺テハ末代ニ至テモ家ノ恥也」ト、駒ヲ早メテ出ケルガ、州俣川ヲ渡ケレハ中書ニ行会、打連テ大垣エ引入ケル。

サテ竹鼻城中ニハ、本丸ニ杉浦五左衛門・二丸毛利掃部・梶川三十郎・花村半左衛門在リケルカ、羽柴左衛門大夫・長岡越中守・加藤左馬助・京極修理大夫ハ、河ヲ越テ竹鼻城エ押寄ルトヒトシク、ヒシヒシト打圍テ、弓鉄炮テ打懸ル。毛利掃部・梶川三十郎ハ、正則ト久敷交語ナレハ「降参仕レ」ト申遣ケレハ、早速同心シテ城ヲ開渡ス。本丸城主杉浦是ヲ見テ、「臆病ナル者共哉。人間五十年ト云ズヤ。侍ノ道ヲ守テ死コソ本意ナレ」ト、弥々士卒ニ下知シテ、爰ヲ専ト防キケル。纒カニ卅五・六人ノ者共、アナタコナタエ走り廻リ、城ヲ乗レシト稼ギケレトモ、数万ノ寄手、弥カ上ニ成テ乗入ケレハ、蒼海ノ一蠡測ルニ所ナク、城ノ兵一人モ不残討死ス。杉浦モ、今ハ不叶トヤ思テ、自城ニ火ヲカケテ、腹掻切テ伏ニケル。「天晴猛キ武士哉」ト、惜マヌ人ハ勿リケリ。是レヨリ寄手衆ハ近辺ヲ放火シテ、大良堤ニ陣テ取ル。

これによれば福島らの諸將は、二十二日、萩原の渡で萩原川（古川・日光川）を越え、尾越の渡して木曾川を越えようとしたが、竹鼻城主杉浦重勝らは西岸に芝士居や柵を設け大筒・小筒を並べ打ちかけてきたため下流の加賀野井へ迂回し渡河、美濃に侵入した。渡河の阻止に失敗した杉浦らは竹ヶ鼻城へ籠城したが、加勢の島津豊久は大垣へ退転、二ノ丸を守備した毛利広盛・梶川三十郎らはおかねて交誼のあった福島正則に降伏した。残された城主杉浦重勝は本丸にて壮烈な自決を遂げたとされる。

一渡河地点となった加賀野井城主加賀野井重望はその一月前の七月十九日、三河国池鯉鮒に滞在。同地で三河刈谷城主水野忠重が浜松から越前府中の新領に帰る堀尾吉晴を歓待し

て酒宴を催した際、同席したが口論になって忠重を殺害、重望自身も堀尾によって返り討ちにされている。そのため、加賀野井への渡河は地元の城主不在の隙をついた作戦でもあった。

『慶長軍記』は寛文年間に伊勢久居藩士で兵法家でもあった植木悦がまとめたもので、関ヶ原合戦を主題にした軍記物の嚆矢であり、『関ヶ原軍記大成』や『美濃雜事記』・『慶長五年岐阜軍記』をはじめとした多くの書物にも広く影響を与えたと考えられる。ただし、福島らが渡河の後に展開したとされる竹ヶ鼻城の戦いに関して一次資料で確認することはできない。

福島らの木曾川越の戦いを記したものととして次のような文書が確認できる。

A 福島正則書状写

急度致言上候、一昨日廿二日はきわう・おこし舟二而我等為先手相越、かしのい・竹かはな近辺令放火、翌日未明二岐阜江押懸、即時二町追破、すいりゆうし二丸三ツ御座候、弐ツ其外二三ノ丸悉く乗崩、(中略)

次城責申候刻、うしろつめ心二石治部者かうと河向まで罷出候処、黒田甲斐守・藤堂佐渡守ら向川をこし一戦二及、追崩敷多討捕候由候、定而様子直二可被申上候、今日各相談仕明日佐和山表江相勤、重而御吉左右可申上候、恐惶謹言、

八月廿四日
羽三州様
人々御中
羽柴左衛門大夫
正則判

(「福島家譜」)

B 徳川家康書状写

急度申入候、仍去廿一(二)日萩原渡・同小越ヲ被取越之由候、殊翌日岐阜江可被相働之由、井伊兵部少輔・本多中務申越候、尤存候、其元何やうにも御相談無越度様御行肝要二候、出馬之儀茂聊無油断候間、可御心安候、猶追々御吉左右待入候、恐々謹言、

八月廿五日
家康判

清須侍從殿
吉田侍從殿
浅野左京大夫殿
黒田甲斐守殿
加藤左馬助殿
丹後宰相殿

(「松雲公採集遺編類編纂」)

また、太田牛一(二六三三年歿)の『太田和泉守記』には次の記述がみられる。

八月廿一日福島左衛門大夫 萩原の渡り打越、西美濃より打廻の足輕を出し候、追払おこしの渡り打越、大良近辺焼払、其夜者大良の堤にて夜を明し、

八月廿二日 払暁、に茜部を打越、岐阜近所に陣を取、犬山口推の事、駿河衆・遠江衆さし向られ、池田三左衛門萩原口相図の煙を見て河田の渡り被乗渡、爰にて一柳監物先陣也(後略)

これらの資料によれば、まず、福島正則らの川下を渡河する一隊は二十二日、萩原の渡で萩原川(古川・日光川)を越え、西美濃から派遣されていた足輕隊を追払ったうえで尾越の渡して木曾川を越え、美濃に侵入し、加賀野井・竹ヶ鼻近辺に放火し、長良川堤(大良川大浦)にて夜を明かし、夜明けに岐阜近郊に移動したことになる。

また、尾張衆として参陣していた生駒宗直（利豊）の記録に次のような内容がみられる。

（前略）一其後、岐阜陣にて取懸候時、右之清洲籠城之輩其外尾張衆一所に小越の川越し致候砌、隼人儀ハ兼て心得、先方より川江人遣し置船を取置候故、川に至り人先江越申、一番に向江上り申由二候、竹ヶ鼻邊ハ皆敵勢見え申候へども、それハ一戦も無之かまい不申、岐阜江取懸り申候、（後略）¹⁰

ここには、福島正則の麾下で戦った尾張衆・生駒宗直が後年になつて叙述したもので当事者として、清須城の籠城を経て木曾川の川越における船調達に活躍したといった内容が克明に語られているが、竹ヶ鼻城での戦いは明確に否定されている。

このように福島正則や行動を共にした武将の記録・文書¹¹をみても、福島ら川下から木曾川を渡った諸将が渡河先の美濃の地で大きな戦果を得られたことを確認することはできない。一方池田照政らは、二十二日木曾川の渡河に成功したうえ、米野・新加納の戦いで、織田秀信勢の主力部隊を撃破することに成功し、岐阜城へと迫る状況にあった。

C 池田輝政宛徳川家康書状

去廿二日之御注進状、今廿六午刻参着候 其元川表相抱候處二、

被及一戦数千人被討捕、岐阜へ被追付之由、誠心地能儀共候、

弥各被相談御行、御吉左右待入候、恐々謹言

八月廿六日 家康（花押）

吉田侍從殿

二十二日川上から木曾川を渡河した池田照政らは勝利を収めた。そのため、家康は返信としてCの書状を池田照政宛に送るとともに、同様の書状をD堀尾忠氏・池田長吉・柳直盛・山内一豊・有馬豊氏・松下重綱・浅野幸長宛（照政とともに川上を渡河した武将たち） E 井伊直政・本多忠勝宛（C・Dとともに渡河していないが先遣隊の軍監として）にそれぞれ発給した。また、同時に福島正則に対しては家康から次の書状が送られている。

F 福島正則宛徳川家康書状

去廿二日之御注進状今廿六午刻参着候 其元川表相抱候處、

被及一戦数人被討捕、岐阜へ被追付候由、誠心地能儀共二候、

弥各被相談御行之吉左右待入候、恐々謹言

八月廿六日 家康（花押）

清須侍從殿

Fの文中の「数人」については、これまでCとEの文書に似「千」の脱字であり、C・D・Eと同一内容の文書とされてきた¹²。

しかし、川上渡河戦の勝利について、福島正則は関与しておらず開戦の経緯を含め許し難い出来事であった。家康は福島をつなぎ止めに腐心しており、C・D・Eと同文の文書を福島に送ることの危険性は十分に分かっていたと考える。そのため、この文書は『太田和泉守記』にみられる「西美濃より打廻の足軽を出し候、追払」を指し、本来の文書の表現の通り戦果は「数人」と解するといった可能性を指摘しておきたい。

結果として、織田方の布陣は、河田ルートにその主力がおかれており、竹ヶ鼻城を拠点とした尾越ルートに織田方の配置があったとしても手薄なものであったと考えられる。そのため、木曾川の渡河に関して福島方は華々しい戦果を挙げることができなかった。このことは次の二つの資料からも理解できる。

〇八月廿四日付浅野長政宛福島正則書状

以上

遠路御状忝拝見仕候、爰元之様子羽三左殿・左京殿申談候、随而一昨日廿二日三三左衛門殿・左京殿・遠州衆川越在之処二、岐阜衆少々罷出候を被及一戦被追崩候、手柄共二候（以下略）

この書状では、廿二日長政の子息左京殿（幸長）の活躍を称賛しつつ、「岐阜衆少々」と表現し戦いについては大きくは評価しないといった姿勢が窺える。

○『寛永諸家系図傳』『清和源氏頼光流 丁一 池田』

輝政慶長五年八月廿二日の中に「晩有明日可攻落岐阜之評定正則今日空手而明日大手一人可攻之而奉行井伊本多同其議」といった記述がある。ここでは、廿二日に成果が得られなかったことを「空手」と表しており強い憤りを窺うことができる。そうした中、福島正則ら、竹ヶ鼻城の包囲戦に注力することは池田照政の岐阜城攻撃の後塵を拝する恐れが高い状況であった。

福島らは、大良（大浦）近辺を焼き払ったうえでその堤にて夜を明し、二十二日払暁に茜部を越え、岐阜近所に陣を取ったことから、竹ヶ鼻城の攻略は行わず、岐阜城の攻略や岐阜城の後巻（後方支援）への対応を最優先にしたと考えられる。また、清須評定に関する『池田家履略記』のなかに、「正則かされて議せらるゝは、大山・竹鼻をせめ破るとも岐阜の城容易に陥るへきにあらす、然れば先すみやかに岐阜を屠らんには其余の皆落降るへし、大山を攻ると号し直に岐阜表に軍勢をすゝめ可然かとあるに、各此議に同意ある」とある。東軍先遣隊の諸将にとって岐阜城の攻略が最優先課題であり、このことは、内部への調略を進めつつ中村一忠・一栄をその押さえとした大山城への対応からも読み取ることができる。

それでは、竹ヶ鼻城の攻防戦は全くの虚構であるのか、筆者はその立場はとらない。それは、竹ヶ鼻城に籠城したとされる武将の記録が存するからである。

(一) 毛利家系図

竹ヶ鼻城に籠城した副将毛利広次の子孫に伝えられたとされる系図に次の記述がある。¹⁴

(前略)

其頃竹ヶ鼻之城二楯籠杉浦五左衛門ヲ責討旨福嶋左衛門大夫ヨリ仔之旨承テ毛利広次

等赤目ノ横井伊織介且福嶋ヨリ為検使家土増嶋源次相供二押寄攻戦

(中略)

右五左衛門落城之段廣次関ヶ原二馳行而福嶋左衛門池田三左衛門を以

家康公に御目見仕也

これによれば、竹ヶ鼻城の攻略には、福島正則家中の増嶋源次が「檢士」となり、横目城主横井伊織介に竹ヶ鼻城副将毛利広次が加わった。落城後、福島正則、池田照政の仲介で関ヶ原にて家康へのお目見えをかなえたといわれる。

竹ヶ鼻城における毛利氏の直接的な動向については、一次資料では確認できないが、この直後の慶長五年霜月二十五日付で家康の直臣間宮彦次郎（直元）から知行目録が毛利掃部助（広盛）宛に発給され、石田村一・枝共・大須村・八神村・城屋敷村・東方村（現羽島市）で三千五拾六石余が安堵されている¹⁵。毛利家はその後尾張徳川家の家臣団に付けられており、「毛利家系図」との間で矛盾はない。

(二) 花村氏伝

同じく竹ヶ鼻城に籠城した副将とされる花村家に伝えられた家伝に次の記述がある。

花村氏は、斎藤氏の支流加賀江氏の嫡であった花村修理亮から孫の花村半左衛門へと続いた。半左衛門は、岐阜城主織田秀信の家臣であった竹ヶ鼻城主のもとで、慶長五年八月西軍として戦い、竹ヶ鼻城の落城とともに大浦村（葉栗郡）の聖徳寺へと逃れた。その後本郷村に移り住み同村の開発百姓として地歩を刻み、江戸時代を通じて本郷村の庄屋を務めた¹⁶。

(一)・(二)の資料からは、竹ヶ鼻城の副将のうち福島正則と通じていたとされる毛利広次は、戦後徳川家康の家来間宮直元から所領を安堵され、のち尾張徳川家に仕えることとなる。一方、花村半左衛門はそうした手立てをもちたまま敗将となったため、地元本郷村（葉栗郡）の開発百姓となったといわれる。その内容については、(一)・(二)ともに家の系譜に関

わるものであるが、とりわけ(一)知行安堵状からその系譜の内容について裏付けることができる。

(三) 杉浦氏

最後に、竹ヶ鼻城主杉浦五左衛門定元とその子孫について追うこととする。『慶長軍記』をはじめとする軍記では城主五左衛門定元と次男・定孝壮烈な戦死を遂げた¹⁷とされる。

しかし、定元の長男定政は徳川家臣伊奈氏の家臣となり、武蔵から下総の地で暮らした。これは定政の妻が、伊奈忠次の妻の妹であり、忠次と定政は合婚(深津弥右衛門の婿)の間柄であったからである。こうした関係から定政は忠次の招きにより慶長二年(一五九七)関東に下って家康に仕え、伊原忠次の配下として代官を務めることとなった。定政は忠次のもとにあつて船橋大神宮造営の添奉行などをつとめて活躍し、松伏領大川戸の陣屋御殿を家康から拝領している。(杉浦家由緒書)¹⁷

豊臣秀吉の晩年、長男を関東の地に送った杉浦定元、その理由は不明確であるが、東西の勢力に挟まれた美濃の地の領主として壮烈な死を遂げた¹⁸とされる一方、家の存続を図ったとするのは、穿った見方であろうか、何れにしてもこれらの資料からは、東西に展開した両勢力の間で旗色を明らかにすることを求められた美濃の武士たちの姿を垣間見ることができ¹⁹る。

結語

関ヶ原合戦の前夜、およそ一ヶ月にわたり濃尾平野では激しい攻防が繰り広げられた。本稿ではその時期の東軍先遣隊の主将福島正則の動静を通じて、竹ヶ鼻城籠城戦の実態について考察をおこなった。わかることとして

- 1 竹ヶ鼻城の戦いは一次資料では跡付けられず、周辺資料を探っても痕跡がみられない。
- 2 この戦いは江戸時代『慶長軍記』をはじめとする軍記物によって広く伝えられた。
- 3 竹ヶ鼻城の戦いには、福島正則をはじめとした東軍先遣隊の主力は参加していない。

理由としては、岐阜城の攻略が最優先であり、川上の池田照政を中心とする部隊が岐阜に迫る中、竹ヶ鼻城に主力を割き時間を費やす理由はない。

3 実際の竹ヶ鼻城の戦いには、横目城主横井伊織介時泰や竹ヶ鼻城の副将毛利広次が主力となり「檢士」(目付)として福島正則家中の増嶋源次が加わった攻撃であったと考えられる。

今回は対する東軍先遣隊の美濃攻略について主に福島正則の動静を中心として考察した。慶長五年八月東西両勢力の間で対応に苦慮した織田秀信は、結局西軍に与した。そのため美濃の諸将の大半は西軍として、大垣城、竹ヶ鼻城、岐阜城、犬山城を結ぶ木曾川での防衛線を引くことになり、対立の最前線に立つこととなる。いわゆる東軍の西上に対して、毛利・石田らの勢力は西国を中心として多方面展開を図っており美濃に兵力を集中できない状況が生じていた。西軍の敗北は、東軍の木曾川渡河に対して幅広く防衛線の構築が求められるなか、兵力が結集できないことによる結末であった。

当県では二〇二〇年十月に岐阜関ヶ原古戦場記念館が開館し、この時代の展示・調査研究等がより深められている。今回紹介した毛利家関連資料も昨二四年秋の同館特別展で一般に紹介されている。

また、昨二〇二四年八月に各務原市歴史民俗資料館主催の関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム「慶長五年八月の美濃」¹⁸が開催され、筆者は基調講演を担当した。本稿はその延長線上としての論考である。その際のパネラー奥村和磨氏、内堀信雄氏、あわせてコーディネーターを務めた長谷健生氏、ご助言をいただいた山本浩樹氏、中川創喜氏に深謝申し上げます。

〔補注〕

- 1 白峰旬氏は、石田三成・毛利輝元を中心とする「公儀」としての豊臣政権と、徳川家康の戦いと考えることから、一般的に呼ばれる、東軍・西軍の呼称は使用すべきでないといわれる（同『新「関ヶ原合戦」論』（新人物往来社、二〇二二年）。ただ、ここでは、両軍の同時代での政治的位置づけを問うわけではないので、一般に知られる呼称を用い、家康を大将とする勢力を東軍、石田三成を大将とする勢力を西軍とする。
- 2 先行研究として、山本浩樹「関ヶ原合戦と尾張・美濃」（谷口央編『関ヶ原合戦の深層』高志書院、二〇一四）がある。
- 3 慶長五年八月十九日付井伊直政・本多忠勝宛黒田長政・徳永寿昌等連署状
- 4 慶長五年八月廿三日付伊達政宗宛徳川家康書状
- 5 兵力数については、白峰旬『新解釈関ヶ原合戦の真実』（宮帯出版社・二〇一四）によつた。
- 6 慶長五年八月廿二日付本多正信等宛井伊直政書状写
- 7 『池田履歴略記』（日本文教出版、一九六三）
- 8 『慶長年中記』巻一
- 9 資料中に日付の違いがみられる。日付の変わり目を正子（子の正刻）とするか、明け六ツとするかによつての違いであろうか、後考としたい。
- 10 「生駒宗直物語」（生駒陸彦・松浦武編『生駒家戦国資料集 尾張時代の織田信長・織田信雄父子を支えた一家』一九九三）
- 11 慶長五年八月廿二日付本多正信等宛井伊直政書状写
- 12 中村孝也『徳川家康文書の研究』（日本学術振興会・一九五九）、『愛知県史』資料編13織豊3（愛知県・二〇一）など
- 13 『太田和泉守記』
- 14 「関ヶ原合戦の前哨戦―美濃・尾張の攻防―」リーフレット（岐阜関ヶ原古戦場記念館・二〇二四）、また同種の資料が『羽島市史』一通史編（羽島市・一九六四）に収載されている。
- 15 『羽島市史』史料編上（羽島市・一九六七）
- 16 岐阜県所在資料目録第56号花村武史家文書目録（岐阜県歴史資料館・二〇〇七）
- 17 『越谷市史』一通史編上（越谷市・一九七四）
- 18 関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム「慶長五年八月の美濃」リーフレット（各務原市歴史民俗資料館・二〇一四）



濃州関ヶ原合戦（慶長5年8月～9月）

（関ヶ原町歴史民俗学習館提供の図を修正）